

【3】 研究の経過と本年度の取り組みの方針

(1). 63年度（1年次）の取り組み

研究主題を「すすんで運動を楽しむ子」と設定し、生徒の実態と問題点の把握、それにとまなう指導のあり方や内容の検討を行い、運動経験の習慣化（特に朝の活動における10分間走）を中心とした取り組みに重点を置き、運動場面の実践の基礎固めをした。

(2). 平成元年度（2年次）の取り組み

研究主題を単に「運動を楽しむ子」だけでなく、あらゆる場面で「すすんで生き生きとからだを動かす子」と設定し、運動場面とともに生活場面での「からだづくり」を重視した。これは、保健体育、養護・訓練をベースにした取り組みを、生活一般や職業科といった領域での実践にも拡げ、運動場面で培った力が、働く意欲や態度をも育て、社会的自立をも促すものとなることを期待した取り組みであった。また、朝の活動を週時程の中に帯でとり、課題別トレーニングを盛りこむなど、個に応じた指導ができるような教育課程や学習集団の編成の工夫に努めた。

(3). 平成2年度（3年次）の取り組み

2年次までの運動場面での取り組みが定着し、生徒の変容も見え始めてきた。そこでこの取り組みを一層充実させつつ、生活場面での実践に比重を移した取り組みとした。特に、運動場面で培ってきた力が、生活場面でのどのように生かされ発展させられたかという、生活場面と運動場面との関連を検討した。また生活場面の実践では、態度とか技能、集団の中で生きるといったメンタルなものに着目した取り組みを試みた。そして、メンタルな部分の評価や変容を把握しやすいように「職業科における評価の基準表（試案）」の作成にも着手した。

全校的な取り組みとなった「授業づくり」については、「学習集団」が個々の生徒の発達課題に対応できるものになっているかどうかに着目し、教育課程編成上で十分な配慮を加えたり、授業展開の中でも、生徒が活動しきれるためのグループ分けに創意をこらした。このような実践の中で、特に重度・重複といわれてきた生徒たちの活動参加への意欲の向上が顕著にみられるようになった。

このように昨年度は、からだづくりの実践で培われた力を、社会で生きぬいていける力にまで高め、その生徒なりの社会的自立や社会参加につながれば、という願いが前面に出た取り組みであった。

(4). 本年度（4年次）の取り組み

本年度は、昨年度の実践をさらに充実させながら、からだづくりを通した研究実践の最終年次として、今までの実践のまとめとその評価に重点を置いて研究をすすめた。一つひとつの実践をふり返るとともに、4年間の実践の積み上げにより、めざす生徒像にどれくらい近づいたのか、どんな成果をもたらしたのかなど、4年間を検証していくような気持ちで取り組んだ。

「授業づくり」においては、からだづくり養訓と職業科の二場面を特に取り上げて、昨年度までの実践をさらに発展させた。からだづくり養訓では、従来の運動能力や体力に視点をあてたグループ編成としてきた点に加えて身体機能や障害そのものにも視点をあてて編成した。さらに、10分間

走においては、3年間の実践の積みあげに立って、持久走での記録の向上よりむしろ、自分のめあてにむかってすすんで走ろうとする「意欲」の向上をねらい、評価していく方向にむかっている。

職業科の場面でも、同一教材複数課題をテーマとし、28名全員が取り組めるような教材探しに奔走した。また、校内職業実習の回数を増やして定期的実施し、学校生活の中でも、より社会に近い環境を定期的につくり出し、働くリズムの確立に務めた。昨年度着手した「職業科における評価の基準表」の作成は、本年度の大きな研究の柱であり、検討・改定を重ねて成案を得ることに尽力した。

昨年度にひき続き、社会で生きていける力を育てることに重点をおいた取り組みを行ったが、本年度の特徴は上記のように、従来当たり前のように見過ごされてきた面にもスポットを当て、個への対応がより一層細かくできるように大胆な改革に踏みきった点である。

【4】 生徒の実態

生徒の実態を把握するための諸検査は、比較対照しやすい利点から研究初年度より同じ検査を実施している。初年度の詳細な実態調査（紀要第10集参照）に基づき、本校高等部の生徒の実態と問題点がうきばりにされ、研究テーマの設定へと結びついた。年々、生徒の障害は重度・重複化し、諸検査による数値ではほとんど変容がないように見える生徒も多い。しかし、4年間という長いスタンスでみれば、数値には現わすことの難しい意欲面や、生活年齢による変容等もあることを頭におき、数値にばかりとらわれない実践の展開を試みた。

〔1〕 障害別にみた実態

	程度	ダウン症	自閉症	てんかん	単純精薄	その他	重複
1年	軽1 中5 重3 (計9名)	1	2	3	2	小人症1場面カン黙1 情緒障害1	2
2年	軽0 中6 重3 (計9名)	2	2	0	3	情緒障害1 PW1 構語障害1	2
3年	軽2 中6 重2 (計10名)	2	0	1	5	CP後遺症1 CF1 小人症1色覚異常1	3
合計	軽3 中17 重8	5	4	4	10		7

※ 軽…軽度 中…中度 重…重度 PW…プランターウィリー症候群

CF…クラインフェルター症候群、言語未発達の子供6名

(目的) 障害の種類や程度を把握し、全体的な傾向をつかむ。

(考察) 障害が多種多様で、主障害以外にも何らかの障害を有する重複障害の数が増加している。

また、軽度は1割弱で、重度化の傾向が強く、発達段階の違いが非常に広がっている。